

小田原史談

第 133 号
発行所 小田原史談会
小田原市南町 2-3-21

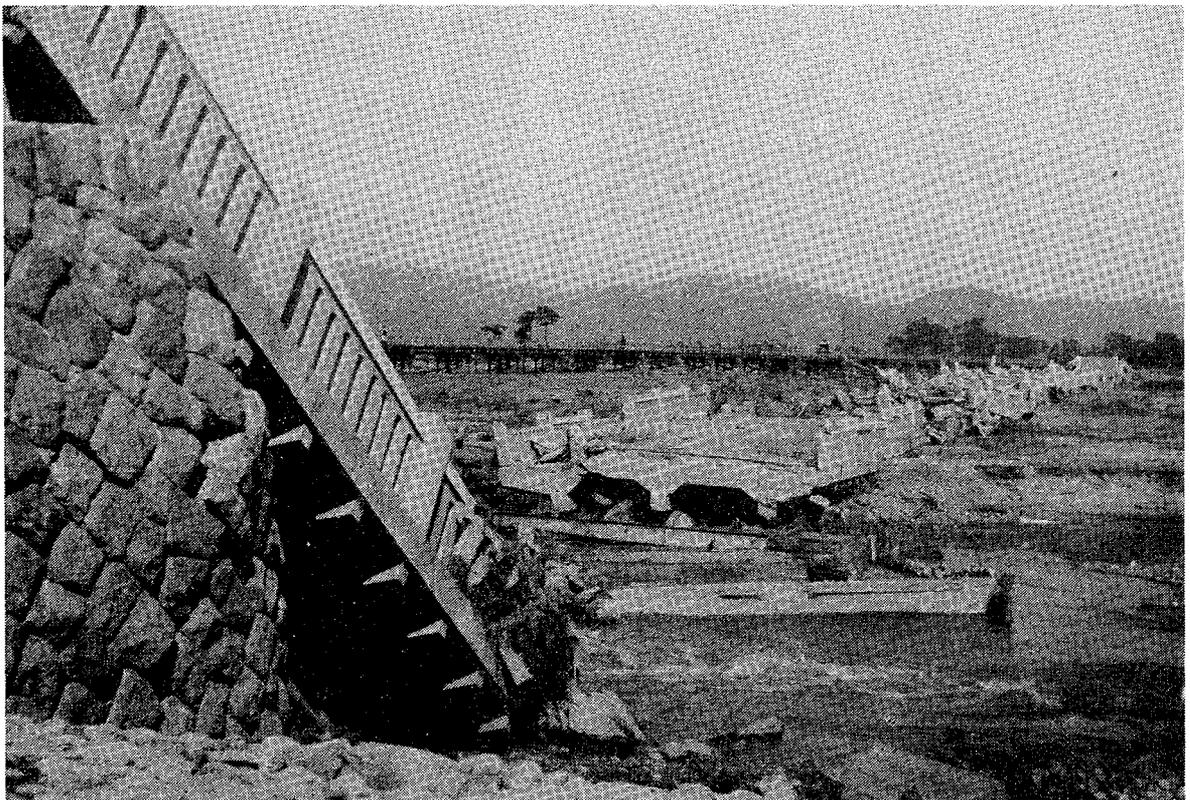
天災は忘れた頃来る 忘れまい関東大地震

大正十二年(一九二三年)九月一日の関東大地震から数えて、今年昭和六十二年はちょうど六十五年目にあたる。地震の原因が、日本の位置する大陸プレート先端へ太平洋プレートがもぐり込むことによって惹き起される事は現在では誰でも識っている。そしてこの地震を起すエネルギーが、関東地方ではおよそ七十年内外を周期として最高に蓄積され遂には大地震を起してきた歴史事実も亦人のよく識るところである。これらの事実から今より十年後内外には小田原地方に再び大地震が襲来する可能性を、多くの情報私達に警告しているのである。

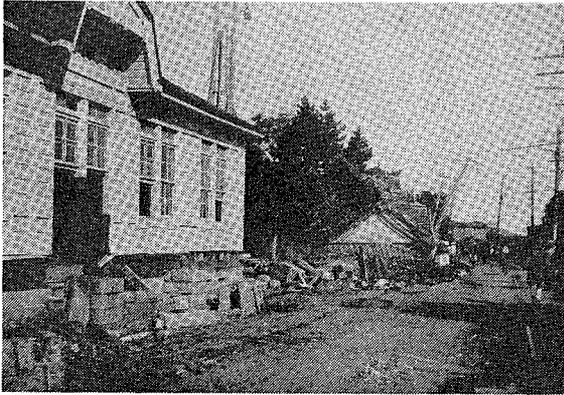
それでは大地震はどのような災害をもたらすのか、大正十二年の関東大地震を体験した人も今日では数少なくなつた。幸い関東大地震災害を写した貴重な記録写真は今日でも保存されている。今ここにそれら災害写真の一端を掲載してその惨状を再確認し、一旦地震襲来の折りの覚悟

を促すことも、亦時宜に適した情報であろうかと考えられるのである。そもそも大正時代と言う年代は、第一次世界大戦に際して日本国が欧米諸列強に伍して先進国の仲間入り成し遂げ、又経済的にも急成長をみこまされたのだが、大戦終結後は一転してその反動によって恐慌の嵐のみこまれ、最後の段階で関東大地震を蒙った時代変革の激動期であったのである。

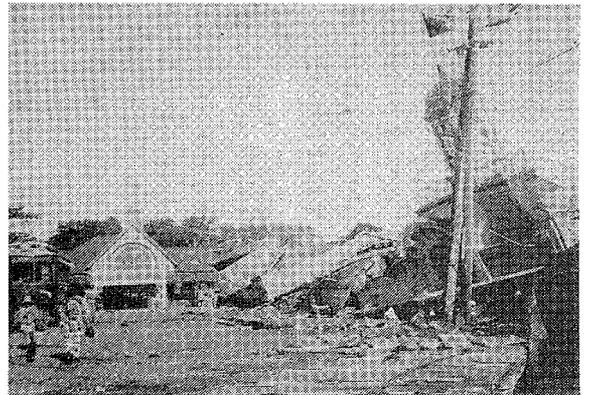
なるほど関東地震は広い日本の一部の災害であったが、政治経済の中心であった帝都が壊滅したことは、それからのちの日本の運命を大きく変えて行ったのである。私達は関東震災の意味を単なる自然災害と見るにとどめず大きな歴史転換期を意味するものであったことにもっと関心を払うべきであろう。しかし此処でそれに触れる余地はない。災害写真の一とコマを歴史の表情として熟視したい。(高田)



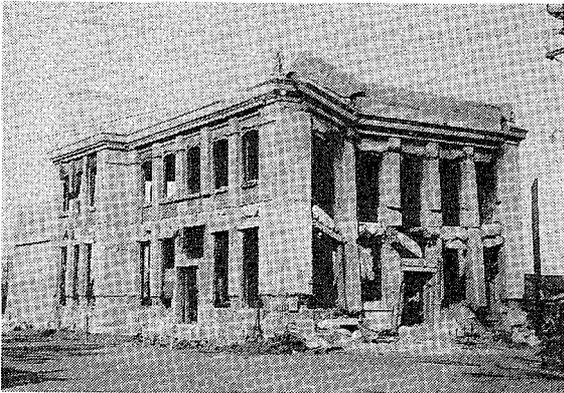
大正大地震で崩壊した鉄筋コンクリートの酒匂川橋
震災数月前ようやく完成したばかり



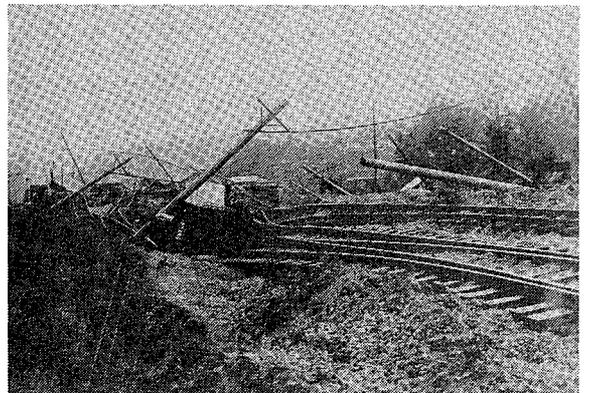
小田原警察署とろいろ



小田原駅前



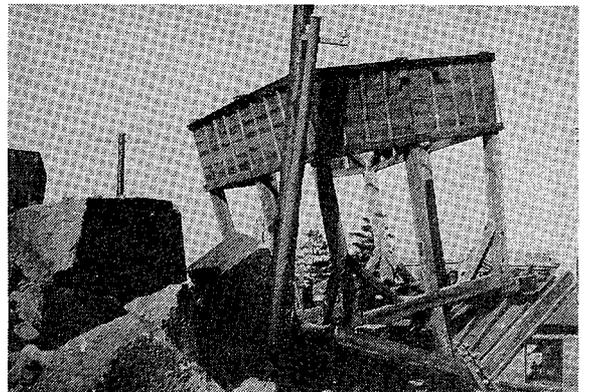
幸町小田原通商銀行



小田原駅構内



閑院宮別邸



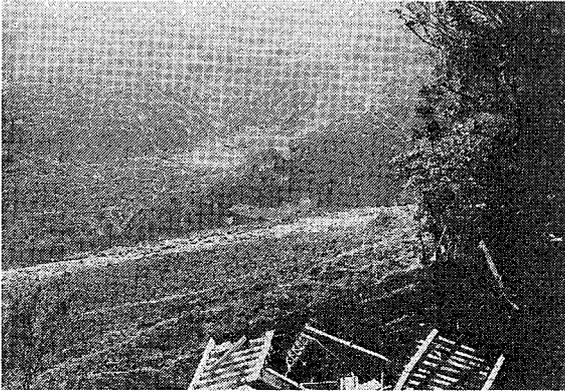
足を空に向けた鐘楼



箱根国道(板橋)

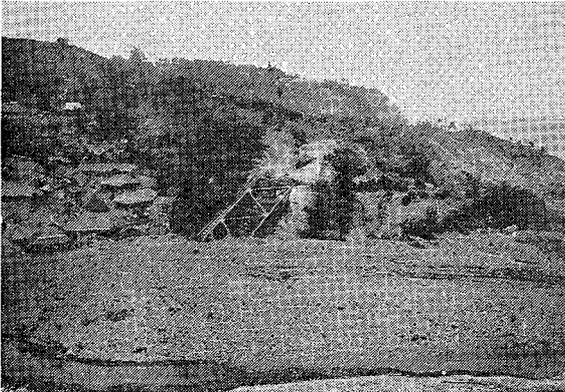
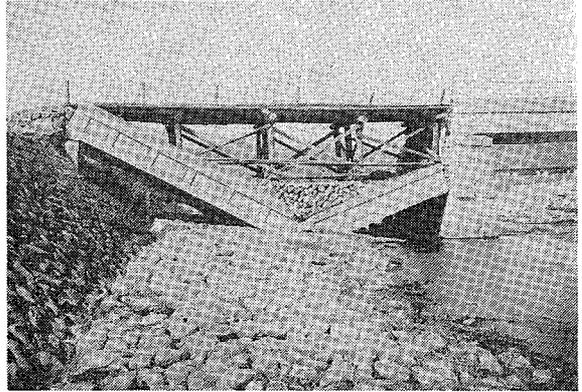


小田原城二の丸跡



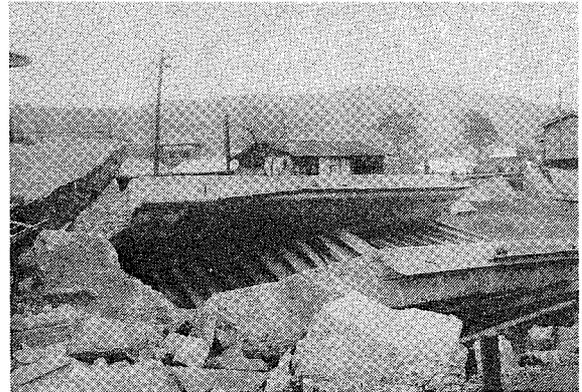
白糸川鉄橋

早川橋



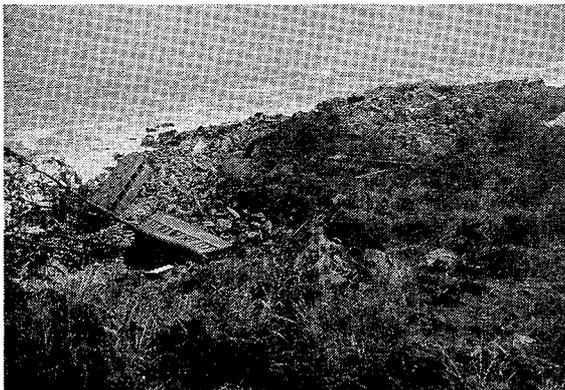
根府川

下曽我駅構内



根府川駅附近

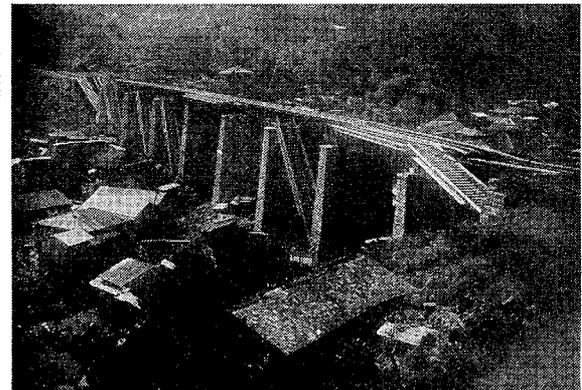
下曽我駅前



根府川駅附近

石橋鉄橋

七台のうち五台埋没



西さがみの地震

神奈川県温泉地学研究所長

大木 靖 衛

この稿は、去る四月二十四日(日)、小田原市郷土文化館に於て開催された本会総会の折の、大木先生の講演を要約したものです。近々やってくるであろう小田原地震について、最近の学界の研究動向を踏まえ、最新の情報を元に、極めて有益なお話しをして下さいました。当日出席できなかった方々には是非知って頂きたいと、先生の許可を得てここに掲載する次第です。

いま、小田原地震が注目されている

この二、三年、小田原地震というものが、新聞に伝えられるようになりまし。昭和五十一年に東海大地震が予告されました。大きな被害の出る地域は、静岡県のほか、神奈川県では相模川以西の地域です。小田原が含まれています。この地域の皆さんは、東海地震が何時くるかと心配していますが、その地震はまだやってきません。それが、急に小田原地震がやってくる、というとなると「東海大地震をそっちのけにして、小田原地震とは何んだ」ということで、整理がつかないでおられる方も多いと思います。

そこで、小田原地震と東海地震とは、どのように違うのか、お話しを申しあげたいと思いま

分ってきた

小田原地震のイメージは、歴史地震の研究が進んで、次第に分ってきました。

古文書のほんの一行か二行の記載のなから地震の意味を読みとることができるようになりました。大部分が皆さんのように歴史を勉強なさっている方々のお力によって解説されたものに、地震学の知識を付け加えると、小田原地震というのが、だんだんと分ってくるのです。

このような皆様の研究成果をもとにして、小田原附近は、こんなに地震が多いところである、という話に移って参りたいと思います。

関東地方の被害地震について過去五百年ぐらいを遡ってみま

す。古文書によって小田原城の地震の被害の修復をした年代を見ますと、大体七十年間隔ぐらいいなっています。詳しく計算すると七十三年間隔となります。大正の関東大地震に、七十三年を足しますと、一九九六年になります。あと八年しますと、再び小田原城の石垣を揺がすような地震が起きそうです。これが、非常に素朴な方法で求めた小田原地震の周期です。

地震の起きる理由につきましては、この二十年間ぐらいの間に非常に簡明になって参りました。

最近の地震の研究によりまずと、地震の原因は断層運動にあります。その断層が一度に二、三メートル、あるときは十メートルずれたとき、大きな地震が起きるのです。

お手許に資料の図(五ページ)を見て下さい、巨大地震のほとんどは、本州から百キロとか二百キロメートル離れた海底で起きています。日本海溝に向けて、太平洋の海底巨盤(大平洋プレート)が矢印の方向に、一年間約十センチの早さで進み、日本海溝で本州の下にもぐりこんでいます。もぐり込みに応じて本州の陸地は歪み、ある限度に達すると本州の板バネが、板バネのように跳ね返り地震が起きる訳です。

小田原地震とは

小田原地震とは、小田原附近に震源があり、小田原に大きな被害を与えた地震を小田原地震と呼ぶことにします。

小田原地震につきましては、過去三百五十年間に(江戸時代から現在まで)大きな地震が五つもあります(六ページ参照)。

寛永小田原地震

寛永十年(一六三三)の小田原地震について見ますと、マグニチュード(以下Mで記します)は七でして、小田原の町並は皆倒壊、小田原城は大破しております。なお、この被害状況は、小田原藩以外からの出典のため、寛永の地震を調べている人は、何とかして地元の小田原から、その被害状況を記した古文書が出てこないかと捜しております。

元禄大地震

寛永地震から七十一年たちまして起きました元禄十六年(一七〇三)の大地震は、房総半島の先端から小田原にかけて大きな被害を出しております。M八・二と大正大地震より大きなものです。

この元禄の大地震の二十年前には、前兆現象として伊豆大島の噴火があります。元禄大地震の四年後の宝永四年(一七〇七)十月東海大地震が発生、さらにその一カ月半後には富士山の大噴火がありました。このように大事件というのは連鎖反動的に起きています。

宝永噴火後の百年間は、酒匂川は、火山灰の泥流で氾濫を繰り返す訳ですが、二宮金次郎が活躍する頃は、その泥流がかなり収まった頃です。

天明小田原地震

元禄大地震の七十九年後の天明二年(一七二二)の小田原地震は、M七・三で小田原城の天主閣は北東に三十度傾きました。このときも、伊豆大島噴火という前兆現象があり、五年前の安永七年(一七八七)には、三原山が噴火し溶岩が海にまで流れ出しております。また、地震から一年たった翌三年には、信州の浅間山の大噴火があり、麓の集落が溶岩流に埋まってしまおうという大きな被害がありました。さらにその火山灰で日光が遮られ、天明三、四年と冷害に見舞われたと言われています。この天明の飢饉のため九十二万の人が亡くなるといふ大事件があります。

嘉永小田原地震

それから七十一年後の嘉永六年(一八〇三)に、また小田原地震が起りました。この年はアメリカのペリーが浦賀に來航した年です。この小田原地震は、翌安政元年(一八五〇)の、M八・二という東海大地震の前兆でした。この東海大地震の翌日南海大地震が発生しています。地震は東から西へ

小田原地震の次に東海地震
 このように、地震は東から西
 に向って起きている例が大変多
 いことが分ります。伊豆大島噴
 火、小田原地震、東海地震とい
 った順を辿っております。

関東大地震
 次が七十年たつての大正十二
 年(一九二三)の大正大地震ですが、
 この十二年前に、やはり伊豆大
 島の噴火があります。

これら関東大地震や小田原地
 震の七十三年の周期性から推定
 しますと、一九九六年に小田原
 地震という順序になります。が、
 その前兆と思われる伊豆大島の
 噴火が、既に六十一年十一月に
 起っております。

もし、このまま推移して行く
 ならば、小田原地震のあと、昭
 和五十一年に指摘された、M八
 ぐらいと考えられている、東海
 巨大地震がやってくることに
 なります。

小田原地震と東海大地震との
 関係は、このように明快に整理
 されまして、小田原地震が東海
 大地震の前兆として起きると考
 えられている訳です。(石橋一
 九八七)

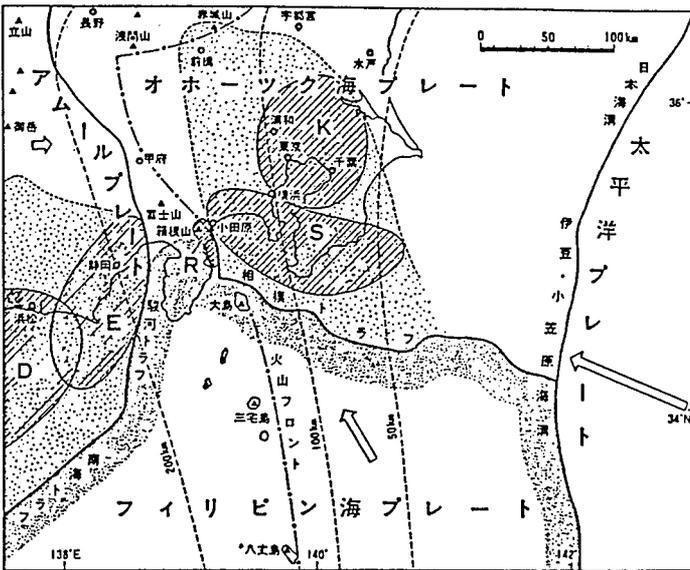
予想される
 小田原地震の震度
 M八クラスの関東大地震の震
 源地を小田原海岸の沖合、十キ
 ロから二十キロメートルの海の
 底とすると、どの位揺れるか、

震度を考えますと、小田原海岸
 から百キロメートルぐらいは、
 震度六の烈震で、建物は相当数
 破壊します。震度五の強震では、
 建物は倒れませんが、人が倒れ
 るとか塀が壊れます。震度四で
 はほとんど被害が出ません。東
 海大地震がM八ぐらいである
 すると、震源から百キロメー
 ル以内の相模以西から、小田原
 を中心としての西がみの地は、
 震度六の烈震で、建物が多数倒
 れるような被害が出ると考えら
 れています。

昭和五十三年に制定されまし
 た大規模地震特別措置法は、M
 八クラスの巨大地震を予知して、
 地震の被害を最少にしようとす
 るものです。あと、八年か十年
 のうちに起るM六〜七の小田原
 地震を予知しようのするもので
 ないのです。

しかし、昭和六十二年から国
 が中心となって、小田原地震に
 ついての予知研究を開始しまし
 た。小田原地震(M六〜七)の
 予知が可能という結論が生まれ
 たならば、東海大地震対策と似
 たような方策を立てようとい
 う計画です。

大正十二年の関東大地
 震の震源は大井・松田
 しかし、当分関東大地
 震はやってこない
 ところで、大正十二年(一九二
 三)の関東大地震についての震源地



関東・東海地方とその周辺の四つのプレートの運動と、大地震の主な発生域。実線はプレート境界の地表線、三本の南北に走る破線は太平洋スラブ上面の等深線、濃い点々の領域はフィリピン海プレート、薄い点々の二つの領域は、沈み込んだフィリピン海スラブ。三つの白い矢印は、オホーツク海プレートに対する太平洋、フィリピン海、アムールの各プレートの運動方向(長さは速さに比例)。斜線をほどこしたD、E、Sはプレート境界巨大地震の震源域、Rは西相模湾断層、Kは首都圏直下の大地震発生域を表す。黒三角は主な火山。

石橋克彦「世界都市東京」を直撃する

『中央公論』1987年9月号より

というと、相模湾の沖だと言わ
 れてきました。ところが研究が
 進んで、震源は内陸部であるこ
 とが明らかにされました。
 気象庁の濱田信生博士(一九七
 〇)が、関東大震災の地震波の記録
 を計算し直しますと、震源地は、
 大井町、あるいは松田町の地下
 という結論になりました。

関東大地震をおこした断層破
 壊は、松田町附近から始まり、
 そこから相模湾に向かって割目
 が広がって行きました。海の底で
 大きな変位が出来て津波が起っ
 たと考えられています。この震
 源の深さは、地下約二十五キロ
 メートルであったので、地表に
 はあまりはつきりと、断層のく
 い違いが生じなかったと説明さ
 れています。

この断層は、大磯丘陵の西側
 丁度JR御殿場線が通っている
 あたりが、国府津・松田断層と
 いう、オホーツク海プレート
 (あるいは北米プレートといっ
 てもよいのですが)とフィリ
 ピン海プレートと相接しています。
 この断層が大きく動くのは、五
 百年あるいは千年に一遍動くの
 ではないかと考えられています。
 関東大地震はおそらく当分起き
 ません。

小田原地震の震源地

それでは、よかった万々歳と
 いうことにはなりません。こ
 の国府津・松田断層の、ちょっ
 と西側になるのですが、小田原・
 真鶴から初島の沖に南北に走る
 西相模湾断層が、七十年とか七
 十三年に一度変位して、いわゆ
 る小田原地震を引き起すのです。
 つまりこの断層は、これから
 十年以内に動くだろうといわれ
 ています。このときの地震は、
 M六ないし七ということ、国
 府津・松田断層がひき起すM八
 の地震のエネルギーの約三十分
 の一です。

地震北上説

ついで、昭和四十九年五月の伊豆半島沖地震以降の震源を追ってみますと、伊豆半島沖地震M六・九、二年経って伊豆川奈沖の地震のM五・四、五十三年の伊豆大島近海地震のM七、五十五年の伊豆半島東方沖地震のM六・七と、二年毎に震源が北に

あがって、この頃、地震北上説がとり沙汰されましたが、五十七年になって、小田原から松田に上ってきませんで、伊東沖では、毎年のように群発地震を繰り返して足踏みしています。

伊豆大島附近での地震は、終つてしまったのだと見ていました

ところ、昭和六十一年十一月十五日、伊豆大島が十二年ぶりに噴火しました。この噴火の予知はできませんでした。十一月二十一日になりました、突如として割目噴火が起き、非常に劇しい地震が起きまして、島民はびっくり仰天しました。

伊豆大島附近での地震は、終つてしまったのだと見ていましたところ、昭和六十一年十一月十五日、伊豆大島が十二年ぶりに噴火しました。この噴火の予知はできませんでした。十一月二十一日になりました、突如として割目噴火が起き、非常に劇しい地震が起きまして、島民はびっくり仰天しました。

田原地震学説は学界や新聞ではかなり報道されたのですが、箱根を控えての観光地であるの思想がありまして、なかなか行政的対応がなされません。日本の地震予知の学問的レベルは高いですが、もし、小田原地震が予知できなかったら、世界中から非難を浴び、金もつけだけはやるけれど、自分たちを取りまく自然環境とか災害に對して何も金を使わない文化のレベルの低い国だと、批判されるに違いありません。このまま放置しておくことは出来ないという学界の主張がありまして、

国が中心となり、昭和六十二年度から年間十億円の予算をつけるようになり、五カ年計画で、小田原地震の予知研究を開始したので。神奈川県も国の予知研究を支援するため六十三年度から、小田原地震予知研究に参加するようになりました。昭和六十三年度は、約二億円の予算で地震計を配置し、井戸を掘り地下水位を観測して、前兆現象を捉えるための研究が始められるようになりました。

伊豆大島噴火の持つ意義
伊豆大島の山頂には、直径約二キロメートルの、ナベ状凹地カルデラがあります。カルデラというのはスペイン語で鍋のことを言います。箱根のカルデラに較べると五分の一ほどの大きさです。三原山は、その中央火口丘で、箱根でいえば神山に当ります。従来、伊豆大島の噴火は、三原山の火口からでした。昭和六十一年十一月二十七日には、中央火口丘の脇腹に生じた割れ目からの噴火でした。外輪山にも割れ目が生じ、そこから溶岩が噴出して、溶岩流は元町近くまで流れ出しました。あまり大きな爆発を繰り返して、激しい地震が連続して起るものです。大島が沈没するのではないかとか、あるいは南にある波

小田原付近の主な被害地震

Table with 3 columns: Year, Magnitude, and Description of damage. Includes entries for弘仁9年, 仁治2年, 永享5年, 寛永10年, 慶安1年, 元禄16年, 昭和5年, 天明2年, 天明8年, 文化14年, 天保14年, 嘉永6年, 大正6年, 大正9年, 大正12年, and 昭和18-19年.

に較べると五分の一ほどの大きさです。三原山は、その中央火口丘で、箱根でいえば神山に当ります。従来、伊豆大島の噴火は、三原山の火口からでした。昭和六十一年十一月二十七日には、中央火口丘の脇腹に生じた割れ目からの噴火でした。外輪山にも割れ目が生じ、そこから溶岩が噴出して、溶岩流は元町近くまで流れ出しました。あまり大きな爆発を繰り返して、激しい地震が連続して起るものです。大島が沈没するのではないかとか、あるいは南にある波

浮の港——これも爆裂火口です。これも割れ目が出来て、大蒸気爆発を起こすのでないかと心配されました。島の住民は、元町や波浮の港で船に乗り、ついに本土に避難しました。

航空写真で見ますと、波浮の港の爆裂口から、やや西に片寄って北向きに外輪山の方向へ点々連なって、噴火口の跡があります。その割れ目噴火には方向性があるのです。大島が丸い形をしないので、じゃが芋のように細長くなるのは、そのためです。割れ目の出来た方向にじゃが芋

の長軸があります。この方向は、相模湾から箱根、富士山に至る広い地域での地下の一番力の強い方向を示しているのです。

この理由は、非常に簡単なこととして、羊羹や豆腐を箸で摘み切る場合と同じ原理です。強く挟んだ方向に切れ目が出来ます。それと同じことで、割れ目噴火が出来る方向に最大圧縮力が働いて、地殻が裂けたのです。また、一番強く圧した方向と四十五度の方向に滑り面が生じます。これが断層です。国府津・松田断層、伊豆の丹那断層がそれで、丹沢山地に行きますと、秦野盆地の周辺の渋沢断層とか神縄断層など、ときに逆断層が見かけられる。逆断層というのは押した方面の距離が縮む場合に出来ます。

小田原地震を引き起す断層

地震の明白な前兆現象の一つとして、地震の空白地域というのがありますが、現在の箱根・小田原地域が、これに該当しています。この相模湾断層を震源とする地震は、大正大地震以降ありません。

昭和四十九年以降の伊豆半島沖地震や大島近海の地震、昨年十二月の九十九里浜のM七、それから今年三月の東京都の直下地震、このような地震が小田原地域の周辺で起きていて、小田

原附近が地震空白域になっています。これも小田原地震が起きると予想される一つの証拠になる訳です。

小田原地震による被害は?

先程からマグニチュード(M)という言葉を用いてきましたが、これは地震エネルギーの大きさを示す一つの単位です。Mが一つあがると、そのエネルギーは三十倍となります。M6はM5の三十倍、七は六の三十倍です。被害の出るのはM6からで、M5はほとんど出ません。小田原地震というのはM6から七で、震源地を中心にして、二キロとか三キロメートルの範囲内では、建物が倒壊するような被害が出ます。二十キロとか三十キロメートルも離れたところでは、かなり揺れるが、壁などにひびが入る程度で、倒壊はほとんどありません。

小田原地震というのは、このような規模の地震です。それで過去二十年ぐらいの日本の地震被害状況を見ますと、M六・七の地震では、建築・土木技術の水準が高くなったおかげで、建築基準法による建物の構造、つまり耐震構造があれば震源距離二十〜三十キロメートル以上の地域の建物は倒壊していません。家を建てる時耐震構造にすることは非常に大切です。家の

中の家具を壁や床に固定するか、台所のプロパンガスのボンベの固定などの地震対策を実施しなくてはなりません。地震が起きたときは、慌てて外に飛び出して、屋根から落ちて来る瓦にぶつかって怪我をしない注意とか、ブロック塀の下敷にならないように心掛ける、といった日頃の対策や心構えをしておれば大丈夫です。このような対策が役立つ地震が七十年に一回は、小田原地域に、必ずやって参るのです。

マグニチュードと地震との関係

地震のとき、どのくらい水平に揺れるかという一般的な計算はできています。M八〜関東大地震はM七・九ですと、その震源が小田原沖とか、大井あるいは松田の地下二十五キロメートルにあるとすると、小田原の変位、最大振幅は五メートルから四メートルあるでしょう。東京にいる人は、小田原からの距離が約八十キロですから、三センチから四十センチメートルと見積ることが出来ます。関東大地震のときは、東京の十倍も水平変位で、しかも足の下から突きあげるような波が来たのです。皆さんのお話を伺いますと、大地震の直前、「ゴー」と物凄い地鳴りがして、あれ、おかしいなと思っている間に猛裂

な勢いでドーンと下から突きあげらるたそうです。小田原地域では、関東大地震は直下型の地震でした。地震発生と共に建物は即座に壊れてしまった訳です。そのようなM八の地震はどうしようもありませんが、そのような地震は当分やって来ません。やってきますのはM六ないし七クラス地震です。

是非必要な地震の知識

それは初期微動
地震が起きたとしてぜひ必要な心得として、皆さんに知って頂きたいことは、初期微動のことです。地殻の歪が極限に達すると、地殻が破壊して、歪のエネルギーは地震波となって四方八方に伝わって行きます。波は粗密波とねじれ波の二つに分れ、粗密波は早く、ねじれ波は遅く伝わるのです。地震を感じたとき、早い波と遅い波の時間差を計りますと、震源が近いか遠いか分るのです。最初の波の秒数に八をかけますと震源の距離を推定出来ます。震源距離を推定するために、それぞれの人が持っているお尻を地震計として使う訳です。地震を感じたら、すぐに「一、二、三……」と一秒毎に数を勘定します。すると、次に大きく揺れて来ますので、そこまでの秒数を数えるのです。これが初期微動時間です。十秒の初期微動では、震源距離は八

十キロメートルとなります。Mが七の地震では、振幅は四センチ程度でしょう。机の下に潜っていれば大丈夫です。但し、震源が二十キロメートル以内の近い場合は、初期微動三秒以内ですから、お尻の地震計では判定できません。「ドカン」という衝撃のような地震は近い地震です。とにかく、物凄い地震になるかどうかの判断は、始めの数秒間を尻の地震計で感知することによって簡単に判定することです。震源が近い場合は、高周波の波は地面に吸いとられてしましますから、長周期のぐらぐらとか、ゆさゆさ相当揺れを感じます。こういうときは、震源が大体百キロ以上離れていて、大部分の地震は大丈夫です。慌てて外に飛び出したりする必要はありません。昨年十二月十七日の千葉県沖地震の例がそうです。震源が近い場合は、初期微動時間の区別が出来ないという地震であることを、よく頭の中に留めておいて下さい。関東大地震を予知された今村先生が示された、大地震の心得の第一条は、「慌てて外に飛び出すな、火を消せ!」というのでありません。「地震の基本の知識を身につける」ことでした。

本日、色々なことを申しあげたことは忘れても、是非初期微動のことは覚えていて下さい。

粗稿

小田原とは
どういふ都市か(5)

石井富之助

内 容

- 一、北条時代の小田原(二二九号)
- 二、江戸時代の小田原(一三〇号)
- 三、明治時代の小田原(一三二号)
- 四、小田原駅開通から市制施行まで(一三三号)
- 五、終戦後の小田原(本号)
- 六、交通都市小田原(次号)

五、終戦後の小田原

終戦後の小田原は、どこの都市でもそうであったように、市民生活の安定と戦後の復興に向って新しい歩みを踏み出したのであるが、日を経るにしたがって徐々にその成果を挙げ、昭和二十三年四月一日下府中村合併を契機として、再建への施策は次々と具体化されていった。

しかし、本格的に市勢の伸張を考へることができるようになったのは、昭和二十四年鈴木十郎氏が市長に当選してからであったといつてよいであろう。

就任後いづくばくもない時であった。市長はわたしに小田原とはいつたどういう性格の都市だろうかときいたことがある。わたしはその時、小田原は足柄上下両郡の中心都市で、商業都市でもあるし、水産都市でもあるし、また農業都市でもある。工

業都市といえなくもないし、文化都市であるし、歴史都市でもある。さらに観光的要素を多分に持った交通都市ともいえるだろう。つまりいろいろな都市的要素を併せ持っているのが特色

のようである。川崎はだれが見ても工業都市であり、鎌倉は歴史都市であるが、小田原はそうはいきれない。そういう意味で小田原には特色、性格というものがない。性格のないのが性格だといつてもよいのではないか。わたしはそう答えたのであった。

終戦後、わたしはこれからの小田原はどういう方向に進むべきであろうか考えたことがある。そして「夢物語小田原発展未来図要旨」という覚え書を書いたことがある。これはその結論といつてもよいのである。

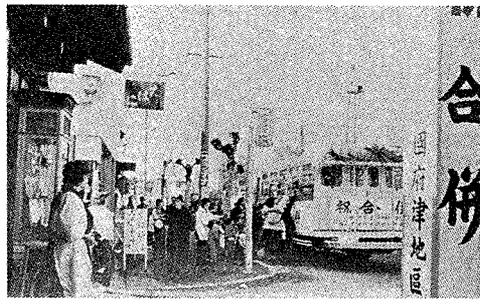
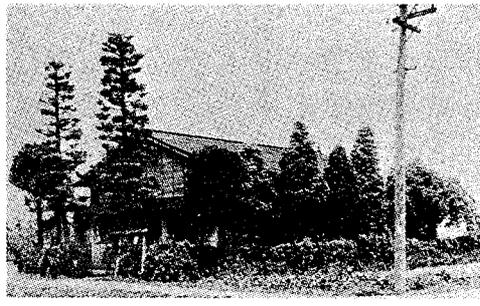
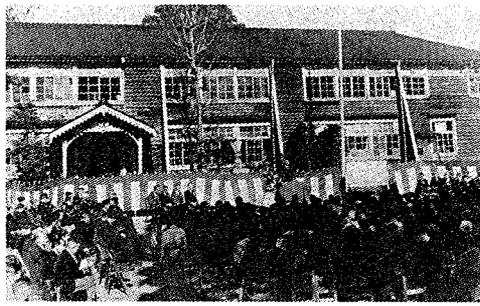
市長もわたしの意見に賛成し

たものか、その後よく「小田原は性格のないのが性格だ」という言葉を使っていた。

小田原に対するこのような考え方が正しいかどうか、実はあまり自信もなかったのであるが、それが決してわたしの独断でもなく、偏見でもなかったことをわたし自身発見した。

昭和二十四年進駐軍は日本政府に対して日本人の読み書き能力について調査するよう命令した。政府は早速東大その他の学者を集めてその調査を依頼した。

作業は直ちに始められた。まず順序として一、二箇所準備調査を行い、その上で全国的な調査を行うことに決定したが、その時準備調査を行う都市として選ばれたのが小田原市であった。昭和二十五年小田原と合併した桜井小学校で行われた廃村式



『目で見る小田原の歩み』より

た。

なぜ小田原が選ばれたのかなか興味ある問題であるが、それについては昭和二十五年東大出版部から出た「日本人の読み書き能力」の中に次のようにしてされている。

一、東京の近くにあり調査に便利であつて、しかも東京の影響を強く受けていないこと

二、特別に産業その他の特色がないこと

これを読んで小田原に対するわたしの見方が誤っていないことを知ったわけである。

小田原は東京を隔たること八十三キロ、最近交通機関の発達によって、辛うじて京浜への通勤距離に入ることができたかに昭和二十九年小田原と合併した農川村の役場

見えるが、それでもなお東京のベッドタウンというにはいさゝか遠過ぎる感がある。また市民の中には小田原を東京の文化圏内にある一都市と考えている者が多いが、子細に検討してみると、藤沢、平塚ほどには近接してはおらず、ちょうど首都圏と地方との中間地点にある都市と見ることが出来る。

産業についていえば、第一次産業から第三次産業に至るまでのあらゆる産業を合せ持ち、さらに歴史的、文化的な要素も備えている。よくいえば総合的なバランスのとれた都市であり、反対に悪くいえば特徴のない中途半端な都市といえないこともないのである。

それから三十年経つた昭和五十九年(昭和二十九年) 国府津地区の合併祝賀宣伝車

小田原のことを載せる小学校3年の社会科教科書

① つづつのできたころ はじめに、古いやしんや地図で、つづつのできたころのことをしらべました。

さいしよのでつづつは、九十年くらいまえにできた、せんろの上の小さな車を人がおす人車をつづつてした。それが十年後には小さなきょうきかん車がつづつるけいべんでつづつになりました。くみ子さんが、「おばあさんに聞いたのですが、けいべんでつづつは、うんちんが高かったの、だれでものれたわけではなく、おもに、近くのおんせんにいく人がのつたそうです。」といいました。

古い地図を見ると、このころは田が多く、家は大きな道にそってならんで、ただけでした。



② つづつのできたころ はじめに、古いやしんや地図で、つづつのできたころのことをしらべました。

さいしよのでつづつは、九十年くらいまえにできた、せんろの上の小さな車を人がおす人車をつづつてした。それが十年後には小さなきょうきかん車がつづつるけいべんでつづつになりました。くみ子さんが、「おばあさんに聞いたのですが、けいべんでつづつは、うんちんが高かったの、だれでものれたわけではなく、おもに、近くのおんせんにいく人がのつたそうです。」といいました。

古い地図を見ると、このころは田が多く、家は大きな道にそってならんで、ただけでした。

大きくなった市

③ せんろ後、市の上すやくらは、どのようにかわってきたか。

「わたしたちの市は、せんろがおわつてしばらくすると、広くなりましたね。」と、先生は、前に勉強した六十一ページの地図を出しておっしゃいました。

「工場もふえました。水道や下水道、公民館もとのえられてきました。まわりの市や町からは、しごとや買いものに来る人が多くなり、道もよくなってきました。」先生のせつめいを聞いて、みんなからいろいろないけんが出ました。

「先生、しんかんせんも通るようになりました。」

「さうぞう道路もできました。」

「でも、車がふえて、じこもふえてきたよ。」

「駅も、のりおりする人だんだんこむようになつてきたわ。」

「このまえ、市役所の人が、「こみが多くなつてきた」といっていました。」

みんなは、わたしたちの市は大きくをり、くらしもべんりになつてきたけれど、こまなことも出てきたのだなと思ひました。



④ 市にのこ古いものをしらべる

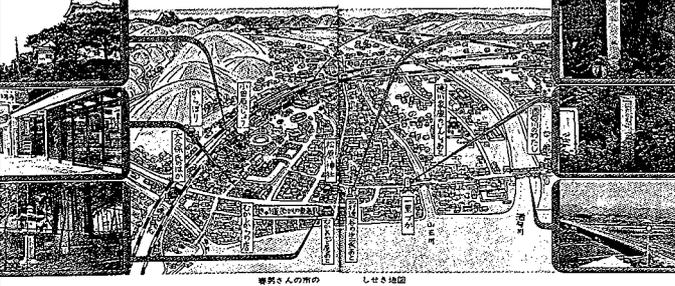
春男

ちば、家や学校などのに、この古いものをしらべたあと、こんどは、市にのこる古いものをしらべてみることにしました。

春男さんたちは、まず、市をしせき地図を見て、市のどこに何ががあるか、さがしてみました。

すると、おしろのほかに、古い店などのたても、むかしの道やわたしの、あつたところなど、いろいろ見つけました。

市役所、昔にのこ古いものを見学して、むかしの市(町)村のようすを、しらべてみましょう。



十五年にわたしはまた一つの発見をした。それは小学校三年の社会科の教科書である。

教育研究所に聞いて見るとこの教科書を作っているところは六社だということであったが、なんとそのうち三社の教科書の内容は全部小田原を題材にとつたものであった。

わたしはびっくりした。六冊の教科書のうち三冊が小田原のことを書いている。これが三年の社会科でどのように扱われているか知らないが、全国小学校のうち相当多数の学校がこの教科

科書を採用しており、同じように非常に多くの小学生がこの教科書を持っているのである。

この事実に基づくわたくしが疑問に思ったのは、どうして小田原が全国的な教科書の教材として取りあげられているのかということであった。そして、ここでも小田原がさまざまな都市的要素を併有しており、どのような課題を研究するにしても非常に便利な都市であるということが、その大きな理由となつてきた。

してみると、昭和二十五年に

「日本人の読み書き能力」の中で判定された小田原の性格は、三十年経った昭和五十五年に至つても少しも変わっていないことになるのである。

小田原市は昭和二十三年四月一日下府中村を合併し、昭和二十五年十二月十八日には足柄上郡桜井村を合併、さらに昭和二十九年七月及び十二月には豊川村、上府中村、酒匂町、国府津町、下曾我村及び片浦村を合併し、越えて昭和三十一年四月には足柄上郡曾我村のうち上曾我外三部落を合併した。

これら一連の合併によって広大な足柄平野の一面を包含し、小田原市はめざましい発展を遂げた。

人口も昭和十五年市制施行当時五万五千人であったものが、昭和三十一年には十二万六千人と増加している。

このことはまさしく発展といつて差支えないと思うが、この人口の伸びはすべて合併によるもので、昭和三十二年以降の人口の伸びが極めて低いことは注目し、値するものであろう。

現在小田原市の人口は十八万

四千人であるが、三十一年の十八万六千人からみると、二十八年間に六万八千人、一年に二千四百人の増加を示しているに過ぎない。

人口の増加だけが発展を意味するものではないが、この数字はあまりにも低く過ぎるといわざるを得ない。

三十年の間に都市としての性格にさしたる変化はなく、人口もまたほとんど伸びていないといふことは緩慢といふべきなのか、低滞といふべきなのであろうか。

筆子塚碑(岩村 瀧門寺)



碑がある。これは算術の師匠・中島花山を偲んで門弟が建立した筆子塚である。

中島は石工(或いは石材商か)であったが弘化二年に没する。

辞世の歌を残した。

なき後えおしへのこさん
十呂盤の

みかける玉の光る

きとくを 花山

これに対し門人は

真実におしへたまわる

算術を

いくと世かけて

恩は忘れじ 門人

と返歌している。感恩をあらわし後世に伝えるため、この二首を彫り刻んだのであろう。

岩村は、すでに述べたとおり元禄期から石材の商業的生産が発達していた。この石材供給に

において、特に割石丁場に働く石

工たちには多分に計数能力が要求される。また、岩村海岸一帯

には、幕命をうけて水戸藩や尾張藩など、諸大名の採石場が開

かれ、江戸城の築城が一段落した後も有事に備えての備蓄がな

され、尾張藩のように、村にその管理をゆだねた藩もあったとい

う。(平凡社『神奈川県の名』)

このような藩の採石場に働く藩士や、在地の石工たちの要求

に答えての、中島花山の算術塾の成立であったと思われる。

なお、この花山は読書の外にそろばんを教えたいわゆる寺子

屋師匠であったのか、それとも高等数学を駆使できる和算家であったのか、今後の究明が俟たれるところである。

足柄地方で、今まで確認した百二十五名の寺子屋師匠のなかに、被差別部落出身者がひとりいる。墓地の一隅に静かに立つ筆子塚にその解放への悲願や闘いの一面をみる思いがして肅然とせざるを得ない。

これから寺子屋師匠の暮しぶりをみることにしよう。

寺子屋は庶民の教育要求を背景に自然発生的にうまれ育ったものであったから、為政者からの経済的援助はなく、筆子からの束脩(入学金)や謝儀(授業料)などによってまかなわれていた。

まず、『日本庶民教育史』(乙竹岩造)によって、神奈川県域内の状況(五十五人の報告)をみると

「束脩の種類は、菓子三十三にして最も多く赤飯二十一にしてこれに次ぐ、そしてこれらは師匠に送ると同時に仲間入りとして多少を論せず寺子(注一筆子)一同に配布せられた。次は銭十七、米七、野菜・素麺・薪等各一にして、持参せざりしもの四、不明のもの三である。」

謝儀の種類は、銭最も多くして三十二を占め、その他は米八、餅七、野菜・手拭・反物等各二、不明六である。これが納入の時期は月毎にせしもの二十三、五節供(注一一月七日、三月三日、五月五日、七月七日、九月九日)

にせしもの十二、正月中元にせしもの六である。この外、炭料は納めしもの十七、納めざりしもの三十三、不明四、畳料は納めしもの十四、納めざりしもの三十五、不明四である。」とまっている。

足柄地方では、小田原やその近郊農村に資料がなく、足柄上郡と箱根に若干の資料をみつけることができる。

金子村(大井町金子)の神官・円山瑠雄の寺子屋(文久三〜明治五)の状況を、筆子の一人であった長坂太郎がその日記に次のように述べている。

牛島村(開成町牛島)の善右衛門が天保十一年十二月に提出した日記には

七月三日 銭百文(注一五百四程) 手習師匠様生身玉

同じ牛島村の善吉の場合は

正月朔日 銭四拾八文 手習師匠貞吉年玉

同 銭百文 手習師匠久吉年玉

二月廿日 銭八拾文 習筆二本

九月二日 銭百文 手習筆六本

箱根宮ノ下の温泉旅館主・藤屋勘右衛門は、天保十三年の日記

に

五月五日 銭百文 子供礼

七月七日 銭百文 子供礼

九月九日 銭百文 子供礼

「まず寺人(注一入学)するには、各自親族に連れられて、蒸物一重仲間入りの菓子に、机と文庫と付属品を持って行き、授業料は盆・暮に付届けをし、季節の祝日には重箱を贈る程度であった。」

また、天保の飢饉で困窮した有力農民などが、借財にたえかねて二宮尊徳に報徳金(無利子)の借用を懇願したのに対し、二宮はその誠意を確保するため、それぞれに日常生活を切りつめた一年間の入用日記を提出させている。(『二宮尊徳全集』十七・十八巻)

弥勒寺村(松田町寄)の徳平の天保十四年の日記には

正月元日 銭二百文 手習師匠へ、俸藤吉とし玉

九月廿日 銀一匁 大学本一冊

銀一匁五分 中庸本一冊

銀一匁 孝経本一冊
十二月廿六日 錢百四拾壹文 折手本二二本
さらに翌弘化元年には

正月朔日 錢百文 椗藤吉、手習師匠へ遣す
七月八日 錢二百文

これらの謝儀は付け落しもあつたと思われる。箱根の藤屋勘右衛門の場合は恐らく隔月に百文宛納めたのであろう。これに対し弥勒寺の徳平の場合は正月・中元に百文乃至二百文のみにとどまっている。牛島の善右衛門・善吉の場合は年間を通しての実態が判然としない。

東海道沿いの農漁村で、江戸へはおよそ一日の行程であった武州生麦村(横浜市鶴見区生麦町)で、代を継いで名主をつとめた関口家は天明九年(一七九九)から嘉永五年(一八三三)に至るまで寺子屋を開いて近在の子どもを指導した。この関口藤右衛門家の当主が代々書き継いで天明九年から明治三十四年(一八九二)に至った日記が、近年、横浜市から公刊された。寺子屋を経営した期間の束脩謝儀が細かに記録され、その廃業後は、関口家の子弟が新しい手習師匠のもとへ通った間の必要経費も記入されている。これによると、束脩は文化年代百文乃至三百文、ごく稀に赤紙・半紙・魚などが記録され、文政三年以降は物価の上昇からか二百文乃至三百文となっている。謝儀は、五節供に百文宛、文政四年以降は二百文宛である。

関口家が寺子屋廃業後、関口家の英太郎は新しい手習師匠(伝七という)に就くが、文久三年の記録を見ると、謝儀は五節供二百文宛、この外に晦日銭、天神講(倉原道真をまつり種々の催しをする)其他の出費がみられる。この町人師匠伝七へ納入した金額をみると次のとおりである。

二月七日 二百文 英太郎伝七方へ手習行二付遣ス、去ル成
年(注一 文久二年)上り候得共相休居候二付
二月二十六日 二十五文 英太郎天神講伝七方へ遣ス
三月三日 二百文 英太郎手習札
四月廿七日 二十五文 天神講
四月廿九日 百文 英太郎手跡稽古二付、晦日銭伝七方遣ス
五月五日 二百文 英太郎手跡札
五月廿九日 百文 晦日銭

廿五文 天神講
六月廿六日 廿五文 天神講
七月七日 二百文 手跡札
七月晦日 百廿五文 天神講・晦日銭
九月一日 百文 晦日銭
九月十九日 二百文 節句銭
九月廿五日 一貫百七十八文 伝七宅屋根修繕
十月先日分 百文 晦日銭
十月十四日 二十四文 手習弟子中下駄入用、伝七遣ス
十月廿五日 百廿五文 天神講・晦日銭
十一月廿五日 二十五文 天神講
十一月廿八日 二百文 晦日銭、当月ヨリ二百文ツツ伝七遣ス
十二月廿五日 二十五文 天神講
十二月廿六日 二百文 晦日銭

以上を合計すると、三貫四百一文の出費であった。この金額は、かつて関口家が開業していた頃の数倍にのぼる。これは、経済的基盤をもち、名主をつとめる豪農が家業の余暇に近在の子どもを教えたのに対し、一方は寺子屋を専業とした町人師匠の立場の相違にもとづくものであった。それにもかかわらず、この伝七師匠は三年後の慶応二年には「諸式高直に而、暮方出来兼候」として寺子屋を廃業している。専業としての寺子屋経営のむづかしさを物語っている。

「……に」「……にか」という言葉

話を強調したり、感情を添えたりするために、言葉の末尾に「……ね」「……よ」と付け加えるのが、現在では一般的であるが、かつては「……に」というふうに使われていたようである。私の知るのは、沼田(南足柄市)生れの人だった。高田掬泉さんの話によると、久野の人がよく使ったと言う。あるいは、足柄地方で一般的に使われてい

江戸に近い街道沿いの農漁村にくらべ、都市からはなれた農山村になればなるほど、謝礼の額は低くなり、金納より物納が多くなるであらう。したがって農山村では経済的基盤をもつ寺院や村落指導層に属する農民などが、本業の余暇に、謝礼の額に拘ることなく慈悲的立場から寺子屋を開業したものが多かったと考えられる。

小田原の城下町や、その近郊農村においても、特に武家師匠などは自己の社会的責任感もあつたであらうが、内実は生計の一助のための寺子屋経営であつたであらう。

とにかくこの足柄地方で、寺子屋が専業として成立することはごく稀なことであつたと思わ

この言葉は、親や目上の人に問いかける場合にのみ用いられたそうである。例えば「食べるにか……」「寝るにか……」と。これに対して、目下の者に対しては、「に」という言葉を添えずに、単に、「食べるか……」「寝るか……」といったように使い分けをした、と言われる。このような言葉を知るのは、六十歳以上の人達であるとのことであり、やがては標準語という言葉の前に、姿を消してゆく運命なのであろう。(岡部忠夫)

小田原画壇に大きな足跡を残された 門松茂夫氏を語る

兎月 人

秋立つ日、海で名残りを惜しんでいると、門松さんが御幸ヶ浜の石段を下りて来た。見るからに嬉しそうな表情であった。私は新聞で、二科展初入選の記事を見ていたので、挨拶すると「どうも」と云って去って行く。昭和十二、三年頃のことか。私はまだ学生で、それ程彼との知己はなかった。当地には、相州美術会(今の西相美術)と云う団体があって、そこで絵や彫刻を発表している方々は多かれ、少なかれ、東京の展覧会に出品していたようだが、門松さんもその中の若手として活躍されていたようである。間もなく、私も油絵を描くようになってからは会員にさそわれ、齢も近いことから、彼が一番親しい人の一人となっていた。彼は絵を描くかたわら、物産の仕事をしていた。私は一時、県の工芸指導所にいたため、益々彼とは親しくなる。彼の絵を描く発端はさだかでないが、小学校からの絵心と、柏木房太郎氏とのつきあいからかも知れない。点描風の温かく穏やかな画風で、井上三綱

氏の流れをくむ、当地独特のものでもあった。私が学校の帰りなどにぶらりと寄り込むと、人形の絵付をしている彼が、五十号程の絵を並べてみせ、意気盛んである。傘貼りの絵、農夫や風景画、そろそろ戦争で絵具もない頃なので、ペンキを自分で溶いて先のない筆で描く、描くと云うより絵具をならべると云った方がよいが、点描風になるのもこんな必然性もあったようだ。キャンヴァスはベニヤ板で、時には張り合せたようなものもあった。昭和十四年の文展に入選しかかって落ちたのも、ベニヤのつぎ目が目立ち過ぎたと云う噂もあった。しかし、彼は右手左手を器用に使い分け乍ら熱心に描き続けて、二科や文展に数回出品した。昭和十五年の文部省奉祝展の「花器」の絵は最盛期を示す。この絵はしばらく物産の小林安多助氏のもとにあったが先頃の火災でおしくも焼失してしまった。昭和十九年には戦禍がひどく、絵どころではない。とうとう彼も召集されたが、間もなく病気で帰還すると、示

し合せたように私が北支に出征してしまう。私が小田原に落着いたのは昭和二十三年で、門松さん等、当地の美術家は再び活動しはじめていた。と同時に、彼の政治運動も盛んになっていった。

さて、このあたりからか、作風も変わって来たのは、大作はやらなくなり、巧緻な農村風景が多くなり、党の目的に参与するような画風になった。西相展には勿論参加しているが、党議員としての動きがはげしくなり、絵はあまり描かなくなった。彼の人柄は絵のように真面目、温厚、誰にでも好かれるタイプで、銀座商店街の評判もよかった。だが中年の頃から何かと体の故障を私に訴えるようになり、昔、多少はたしなんだ酒煙草もぶつりと止めた。私がかたわらでいくら呑み吸いしても関心をもち、意志の強さと健康保持に務めているようであった。湯川治郎会長の後、二代会長に推された時、「今、絵を描く時間がないのが心残りだ」と私に云う。美術家は仕事することが本命である。でも年に二、三度の展覧会には責任をはたしていたのである。

る。でも戦時中兄さんを失くしけない。坐っていても痛いどんな姿勢がよいのか自分でも解らない」と云う。やさしく明るい彼独特の表情に好感もてた。その後、入院が続きその年の暮れに帰らぬ人となったが、七十そこそこで、まだまだの人であ

る。でも戦時中兄さんを失くしお母さんと二人の暮らだったが、間もなく奥さんを迎えられてからは六人の家族の中で静かに眠って行ったのである。
(一陽会会員
西相美術協会会長)



横 臥 (昭和14、15年頃) 門松茂夫作

俳 句

久下みわ

白秋のからたち匂う夕べかな
側溝の流れに乗りて花の屑
六月は憂し山風が袖ぬける

川柳

高井喜雄

それなりに老けて集まる通夜の客
余命延び嫁の辛抱無駄になり
神様も専門がある守り札

入社して敬語と日本語教えられ
僭越と断わる口調慣れたもの



僭越とは存じますが
ご指名でございますので
ひと言

ちぐあん先生戯画



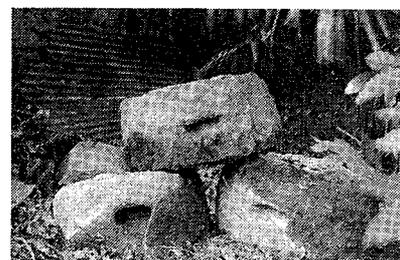
西相模の石造物(7)

小田原市早川の正当石

早川の紀伊神社境内の一隅に円形の石が四個ばかり納められている。直径三十五から三十八cm、厚さ十五から十八cm程。青木友吉さんの教示によるものである。青木さんは、昭和五十九年、箱根ターンパイク入口から八・八km地点に、戦国時代の城址御所山^{みよこやま}を発見しており、地元早川の歴史をこつこつ実証的に探究されている方である。

この石が、単に沢庵石ならば写真に見るような孔は必要ない。この孔は、左右対照に二カ所うがってある。青木さんは、綿実を圧搾して、燈油を絞る際に用いた正当石ではないかと見るが、二軒の間屋に必ず売却せよ、

と。なお、因みに、綿実売買の間屋仲買は天明八年(一七九七)十一月九日に廃止されている。しかし、青木さんは、この石が綿実を絞ったものであると証する資料がないので、正当石として、断定できないと、慎重な態度をとっていられる。(岡部 忠夫)



兵隊ごぼれ話

薪の汽車

昭和十七年三月下旬、佛印サイゴン(現在のホーチミン市)に上陸した私共は、通過部隊の為の兵站宿舎に数日を過した。

森の都サイゴンの道路の上空一杯に覆った街路樹の並木道を、左後方から右前方へ斜めに敷設された鉄道があつて、今列車が此の踏

切りを通る処だ。シュッシュッシュッシュッの黒煙をはきながら左方から走って来た。乗務員が火袋の蓋をあけて、太い長い薪をパッと投げこんだ。夕暮の空が一度にまっ赤になり、煙突からは物凄い火の粉が、煙と共に飛び上り、沢山の火の塊が地上に落ちた。それを何回もくり返ししながら、機

関車は何十両もの貨車を引、張って行った。

「薪で走る汽車」私は生れて始めて見た。小学生時代に、産業に貢献する石炭を称えて、「薪は山程積んでも汽車を走らす事は出来ません」と教えられたのは嘘だと思つた。

後日自修学校へ此の薪の汽車の事を書いて送った。「薪の汽車では皆で大笑いした」と大井校長先生から返事が来た。(西山銜太郎)

史跡めぐり

古稀庵など

和田 登

昭和六十三年三月十三日 道箱根の入口で、道中の安(目)板橋のお地藏さんに全祈願のため昔から信仰してお詣りして会員の集合を待つ。

このお堂に青橋の近くにあった「生木大黒」が安置されていることはあまり知られていない。なお境内には「官軍の碑」もあって、正史にある山崎の合戦の記録である。高田さんの徳川幕府末期の小田原藩の動きについて興味深いお話があり、皆聞き入った。なお山県有朋公筆の忠魂碑もあって、お地藏さんの境内は賑やかである。ここは旧東海

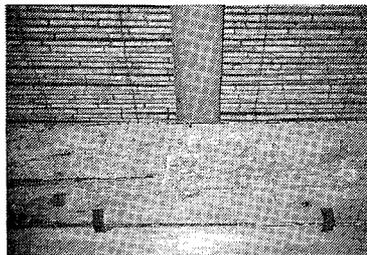
板橋地藏尊胎内仏



地蔵堂は明治八年の火災で焼失し、谷津の慈眼寺の本堂を移したもので興味深いことであった。香林寺には美しい竹林の中に韶陽窟があり、古い墓石が近くにあった。

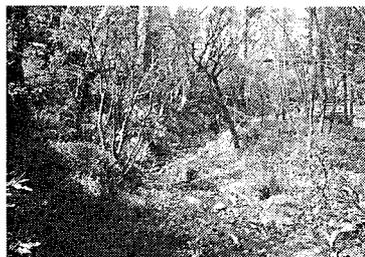
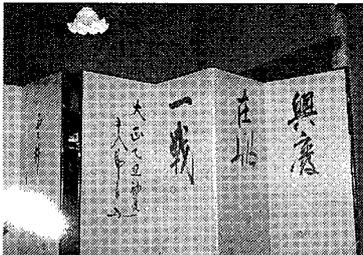
次は古稀庵・皆春荘の庭の見学である。明治四十年山県有朋七十歳の古稀に作庭したもので「打ちいたす相模の海を池にしてあふぐ箱根は庭の築山」「谷水は庭をめぐりて城山の麓の松はまがきなりけり」と有朋はうたっています。公は政界を退き大正十一年に歿するまで、小田原のこの地で過ごされました。有朋公は内閣総理大臣・枢密院議長・日露戦争の大本営参謀総長をつとめた明治の大功労者です。この庭園は近代日本庭園の傑作で、明治大正期の自然主義的和風庭園のルーツとなった。公の歿後十五

山県有朋書



年たった頃、私の中学生の時ですが、庭に続く相模湾を見てびっくりしました。こんな美しいところが、小田原にあるのかと思ったからです。今は相模湾にこの庭は続いていませんが、遣水の部分が保存され、有朋の植えたモミは大きく成長し茅葺切妻四脚門の山門は復元されて、有朋公自筆の額が掲げられています。現在は千代田火災研修センター

東郷平八郎書

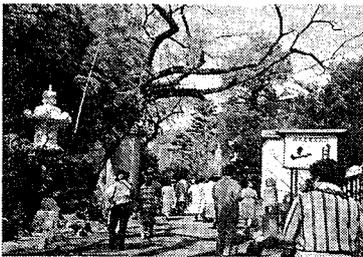


古稀庵の庭

です。一番上の段に皆春荘があり、吉田氏邸です。吉田氏は有朋公の後妻の養子で、ゆかりの品が残っています。山県・東郷両元帥の筆になる金屏風を見せて載きました。こんな立派な作品はいつまでも小田原に残してほしいと思います。○花恋し有朋遊きて五十年 ○冬枯れの水音高き

古稀の庭

山月



皆春荘



山月の由緒ある調度品

山月にて





生木天黒天

真壁敏男画

○古稀庵の借景ひろし
春の海
○皆春荘枯山水の
一の庭
○達筆の万葉仮名や
春炬燵

次は山月です。旧大倉男

爵の別邸で大倉組(大成建設)が当時の最新の機械を持込んでの工事であった。関東大震災に残った貴重な建築物で格天井も建具も立派にそのまま残っている。寝室は襖が二重で、ぬけ道と思われる細い引戸があり、茶室は表・裏千家両用に使

用出来る。仏間からは早川の流れと箱根の山々と一夜

城跡が見え、すばらしく見晴らしがよい。大倉喜八郎は大倉土木をおこし、東京電灯線を創立し、大倉商業を創立し、大日本麦酒線をつくった明治の大実業家である。

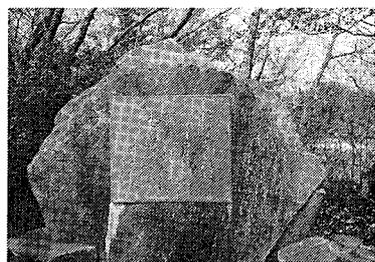
○大正の大倉邸に
冬去りぬ
○みはるかす早川の水
春近し
○海近し襖あければ紅椿
○格天井うまさ料理の
春の宴
昼食後は八幡山の文学碑
群を尋ねた。

康文は小田原下割屋敷染物業井上登次郎の二男として生まれ、本町小学校を経て東京薬学校に学ぶ「詩と評論」の同人「民衆」の記者となり文筆活動、「愛する者」「愛子詩人」「天の糸」などの著者あり、七十歳で歿する。詩碑は「梅は古き枝に蕾をつけず、新しき青き梢に花をひらく」がきざまれている。

○枯芒歌碑 ふるさとの
丘に立つ

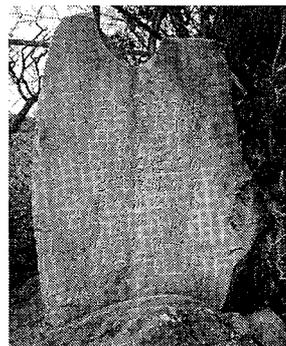
1 井上康文詩碑

2 牧野信一文学碑
信一は小田原市栄町の生まれ、碑文は「割製」の中から、「長い間のあらくれ



た放浪生活のなかで、私の夢は母を慕って蒼ざめる夜が多かった母のもとへ」とある。

○母恋いの碑文
冷たき風の中



6 靖献之碑
成辰の役・西南の役の小田原地方の戦死者をまつる。県下最初の忠魂碑で、松原神社より移したものである。

7 植田先生碑銘
幕末の小田原藩の功労者植田氏等をたたえる碑

出来たことは今回史蹟めぐりの大きな土産となった。

○二の丸の透谷の碑や氷りつく
○民衆碑春を
まねきて
うづくまる

3 俳句碑
・睡蓮を思い浮かべる
・杉くれて地に花しやがの
・雑頭にそまりし石や
猫ねむる 久恵
裏面は高田掬泉さんの文である。

8 忠魂碑
東郷元帥の書、二転二起の記があり、世の移りかわりのはげしさを感じさせる。
小田原高校の樹叢(県天然記念物)のわきを通り小田原城に入る。

9 北村透谷碑
10 福田正夫氏の碑



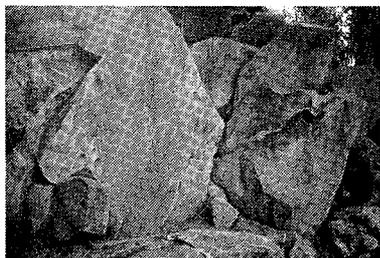
透谷に献す 藤村

4 筆塚
小田原の筆を職としたものの建てた碑である。
○草わけて筆塚の道
枯落葉

水のたまった二の丸の発掘現場を横目に解散する。食事のおいしかったこと小田原の明治をのぞき得たこと。数多くの小田原の碑群を鑑賞出来たこと。なんと

5 二世蜀雲斎の碑
生花宏道流岩下氏の碑

といってもお地藏さんの御本尊を近くにおがむことが



特別賛助会員

智恵袋 相田酒造店 大 営 不 動 産
 足柄香粧株式会社 割 煮 ぶ る 海
 紳士服の **アメリカヤ** 茶半家具株式会社 宮
 伊 勢 治 書 店 こ ちん 聖 う 本 店
 ⑤ か ま ぼ 株式会社 東 華 軒 店
 株式会社 小田原魚市場 八 小 堂 書 店
 ⑤ **小田原ガス** 八 子 マ サ 店
 小田原信用金庫 平 井 書 店
 小田原報徳自動車 富士写真フィルム 齋小田原工場
 ⑥ 小田原中央青果 株式会社 報 徳 屋
 かまぼこ 籠 清 鐘紡株式会社小田原工場 * 〃 松 坂
カネボウ化粧品鶴宮工場 株式会社 **マクル**
 興 電 社 食器の店 マルサンストアー
 清水甘納豆 株式会社 **美濃屋吉兵衛商店**
 ⑥ 正 榮 堂 スーパーマーケット **ヤオマサ**
 鈴 廣 木まぼこ 山口 菓子 舗
辰寿堂スポーツ 湯浅電池 株式会社 小田原工場

特別賛助会費

六十二年決算報告書の収支のうち会報の発行に当てられた金額は下欄の通りです。

特別賛助会費(一〇一万円)四十万円は、三十一社の協賛によるもので内訳は次の通りです。

＜収入の部＞	
一般会計より	354,000円
特別賛助会費	400,000
預金利子	461
計	754,461
＜支出の部＞	
会報印刷費	627,000
会報発送費	17,920
編集費	101,340
事務用品費	8,065
次期繰越	136
計	754,461

三〇 鐘紡(株)小田原工場
 二〇 足柄香粧(株) 一社
 小田原ガス(株) 小田原信用金庫 小田原中央青果(株) カネボウ化粧品(株) 鴨宮工場 ヤオマサ 湯浅電池(株)小田原工場 七社
 一口 二十三社
 支出のうち、会報印刷

費はNo.一二九〜一三二号の四回分です。会報発送費は、特別賛助会員の外寄稿者、寄稿予定者、役所、学校などへの郵送料です(近くは直接お届けしています)。編集費は、謝礼、写真代、コピー代などです。お陰様を持ちまして、会報の充実を計ることが出来ました。今

箱根湯本郵便局 記念スタンプ



後ともよろしくご支援、お力添下さるようお願い申し上げます。

こぼれ話

◎もっと活字を大きくして欲しいという要望がありますが、現状では全面的に活字を大きくするのは困難ですので、一ページに九ポイント活字を使用し、あとは従来通りの八ポイント活字ですが、見やすいように一部紙面を従来の三十九行×十二字×六段から三十六行×十四字×五段にと試みてみました。

◎「西さがみの地震」の講演をして下さった大木靖衛先生は、町制施行三十周年記念事業として刊行予定の『中井町誌』の編集委員として、地形・地質の分野を担当されるそうです。

◎生木大黒天は、昭和二年青橋から小田原中学校(小田高)に登る途中の樟の生木に彫られたもので、当初は根元からひびえが生えており、傍には茶店があった由(真壁敏男氏談)。當時は小田中弓道場の真下に、未完成のままの小田原ホテルの残がいと、城山中学校の所にあった避難舎の建物だけで、住宅は一軒もありませんでした。住宅地になったのは、小田原に上水道が敷設されてからのことです。時移り変り、生木大黒天は、地元の方々の要望があり、アメリカの先代故武田良作氏の奔走により、板橋の地蔵さんに安置されることになりました。

◎関東大地震の写真は『大震災写真帖』から引用です。『大震災記念写真帖』は復刻版が出ていますが、小田原城内高校所蔵の元版を利用して頂きました。司書神保幸子さんにお礼を申し上げます。『大震災写真帖』(湯河原町宮上室伏写真館発行)は真鶴町郷土を知る会々長松本敬さんの所蔵、ご好意に感謝いたします。(陶生)